



特異環境試験場の視察



V2X市街地の視察

術の評価実験が可能となっている。

自動運転については、産官学で開発が急速に進められており、こうした動きに対応するJARIの取組

みの一端を感じ取れる視察となった。視察後、当日のプログラムは終了し解散となった。



実験車両の前に立つ東京都の猪熊副知事(右)とZMPの谷口社長

東 京都と国が共同で設置した「東京自動走行ワンストップセンター」の支援を受けて、遠隔型自動運転システムの公道実証実験が昨年12月14日、お台場地区の日本科学未来館付近の道路で行われた。遠隔型自動運転システムの公道実験は、同日に愛知県などが実施した実験とともに全国で初めて。実施者のロボット関連技術ベンチャー企業、ZMP（東京都文京区）はタクシーへの応用を目指している。

遠隔型自動運転システムは、車両外にいる運転者が電気通信技術を利用して当該自動車の運転操作・監視などを行う自動運転技術で、完全自動運転実現への第一歩と位置づけられている。実証実験は、昨年6月1日に警察庁が策定した「遠隔型自動運転システムの公道実証実験に係る道路使用許可の申請に対する取扱いの基準」に基づき実施される。

実証実験に先立つ開会式で、ZMPの谷口恒社長は「2020年に無人タクシーを実現するという目標に向けて、今日は非常に大きな第一歩をしるす記念すべき日となる」と強調。東京都の猪熊純子副知事は「自動運転技術は成長戦略として非常に大事なのもちろんだが、交通渋滞、交通事故の解消や人手不足対策などさまざまな社会課題の解決に大きなポテンシャルを持っている。都としても全力で支援していく」と挨拶した。さらに、自動走行タクシーの開発でZMPと協業している日の丸交通（東京都文京区）の富田和孝社長は「タクシー業界が抱えるいちばん大きな課題は人手不足だ。自動運転を1年でも早く導入できるように取り組んでいきたい」と語った。

実証実験では、最初にトヨタ自動車のエスティマハイブリッドを改造した実験車両の後部座席に谷口社長と猪熊知事が乗って日本科学未来館の周囲を走行。続いて、完全無人の状態と同じコース走行した。猪熊副知事は車両から降りたあと、「安心して乗れるなと思った」と感想を述べた。

「東京自動走行ワンストップセンター」は昨年9月に設置。最先端のものを含め、あらゆるタイプの自動走行の実証実験について、構想段階から実施に至るまでの相談などを一括して受け付け、関係機関の協力の下でスピーディーに対応することを目指している。これまでに70件の相談が寄せられており、ZMPがその支援を受けて実施される第1号の実証実験となった。 【東京都自動車会議所】